
ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード7: 恋愛小説家 (Bedtime Story)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴーワーク・ラブストーリー／エピソード7：恋愛小説家（Bedtime Story）

【Zコード】

Z6302C

【作者名】

栗須じょの

【あらすじ】

悪友ローマンが思い付いた『ゲイポルノの上映会』。男好きでないディーンはすっかり食傷し、バスルームに引きこもってしまう。同性愛モノのみならず、ポルノ全般に拒絶反応があるディーンの欲情の対象は、生身の人間と“恋愛小説”。それに端を発し、三人は『ゲイポルノ小説』を執筆してみると。なかでもポールの作品はインターネットで好評を得、ディーンはそのことを嬉しいと思う。主人公のモデルが自分であると聞かされても問題はなかつたが、小

説を読んだ友人の反応はちょっと違っていて……。

(前書き)

いわば 一話完結のシリーズ物 につき、ヒプノーシード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

バスタブのふちに腰を降ろし、タバコに火をつける。ここが喫煙所というわけではないが、ひとりでいれば自然とそれに手が伸びるもの。なにもすることがなく、手持ち無沙汰なとき、タバコは唇のいいパートナーになってくれる。

どうしてバスルームでタバコを吹かしているかつて、それは“やむにやまれぬ氣の毒な事情”によつてのこと。“すてきな芸術作品なんだから”と、いうローマンに説得され、週末、自宅を提供したのが間違いのもとだ。彼の言つ“すてきな芸術作品”は、おれにとってのそれじやなかつた。おれが思つ芸術とは、絵画や音楽、せいぜい映画などであり、“ポルノ映画”は、そのカテゴリに入つてはいない。

現在、我が家の中間で行われているのは、ブルーフィルムの上映会。52インチの大画面に映し出される男同士のセックスは、あれを風呂場まで追いつめる迫力に満ちていた。たとえそれが偉大な芸術家の手によるものだとしても、テーマが“男同士のセックス”である限り、それをまんじりと鑑賞するほどの忍耐力を、未だおれは持ち合わせてはいないのだ。

トントンヒドアを叩く音に続き、「どなたか“お手水”を使っていらっしゃる?」と、丁寧な呼びかけが響く。
「開いてるよ」と、引きこもり男。
「ここにいたのね」

現れたのは、この企画の発案者、ローマン。たいがいの口クでもないことは、彼から発信されるというのが、最近のおれの認識だ。「トイレに立つて、ずいぶん時間がかかるから、てっきりマスターべーションでもしてるのかと」

「するか! 吐き気がする!」「んまつ! 差別的発言!」ゲイの守護神は金切り声を上げた。

「受けつけないものは受けつけない。生理的などだ。仕方がないだろ」

「ろくすっぽ見もしないでなにがわかるの？　あの主演男優のセクシーな」と……彼の魅力がわからない？」

「別に。あんなにペニスが長きや、歩くときの大変だらつとは思うけど」

「センスないわね」

「なくて結構。しばらくバスルームいるから、終わつたら呼んでくれ」

ローマンを追い出し、空のバスタブに寝転ぶ。遠く聞こえるは、野郎どもの黄色い声。それは“すてきな芸術作品”を賛美する響き。おれの“ゲイジユツ性”は、彼らに及ばず。ディヴィイツド・ホックニーがなぜ裸の男ばかりを描いているのかを知つたときは、少なからず複雑な気持ちになり、キース・ヘリングの“ポップな絵”が何を意味しているのかを知つたときには、気が遠くなつたもんだった。友達とパーティを楽しめないのは残念だが、精神に負荷がかかるような映像を延々と見続けることは、おれにとつて拷問に等しい。

もういつほん、タバコに火をつけようとしたところで、ドアの向こうに笑い声が響いた。ドラッグ抜きのドラッグ・パーティ。あつちの世界はなんて楽しそう。理解できることと理解できないことがこの世にはあって、極力多くのことを理解できた方が豊かな人生はだらうとは思うのだが、そうであつても『ぼくもゲイ映画を楽しめたらなあ！』とは思わない。芸術とはただの嗜好品。ルーブルに保管されていようと、道つぱたに並べられていようと、モノの価値は見る者の趣味によつて決められる。奇声と嬌声、拍手喝采。あつちの世界におれがいなのは、彼らが好むものとおれの好むものが違つているつて話なだけ。口パミみたいなペニスを持つ男のセクシーさがわかるようになったなら、きっとローマンはおれに何らかの勲章をくれるだろう。

バスルームに置きっぱなしにされ、ページが波打っているジャック・ケルックの路上。何度も手にしても未だ読み終えたことがない、ビートニクの名作を読みながら煙を吹かす。吸い終わつたところで「終わつたよ」と、ポールが顔を出した。

「寝心地は？」

「背中が痛い」

「やつぱりバスタブはお湯を張つて使うのが正しいね……。そもそもなんでこんなところに？ 自分の部屋に行けばいいのに」「あそこじゃ音が聞こえすぎる。おれの部屋のすぐ向こうにテレビがあるだろ。みんなは？」

「もう帰つたよ。ティーンによろしくつて」

「怖いDVDは？」

「大丈夫、みんな持つて帰つた」手を掴み、引っ張り上げてくれるポール。空のバスタブからの奇跡の生還だ。
散らかり放題のリビングルームはまるで爆撃の後のように。後片付けをしながら、おれはポールに質問する。

「きみはどう？ タフキのフィルム。面白いと思つか？」

「まあね」

「ああいうのを観て興奮する？」

「まあね」

「おれはとても無理だ」

「そりゃあ、きみは元々ゲイじゃないもの」テーブルに散らばったピスタチオの殻を拾い集めながらポール。

「そうじやない。おれはポルノつてやつが駄目なんだ。ゲイのフィルムだからじやない。男女のであつてもそうだ。気持ち悪くてとても観ていられない」

「へえ……意外だな」

「ガキの頃はみんなこうこうの観るだろ？ おれも友達から借りたりしたけど、どれもちつとも好きになれなかつた。イタリアのポル

ノを観たときなんか本氣で吐いたよ

「かわいそう」「

「セックスは見るもんじやない、やるもんだ。そう思わないか？」

忙しく働くポールの手を引き寄せる。「明日は久しぶりに一緒に休みだ……。いくらでも夜更かしできる」

「後片付けは？」

「そんなもの明日でいい」彼の首筋に顔を埋め、そこにキスをする。

「フィルムを見ても興奮しないって言ったのに」「

「おれが興奮するのはフィルムじやない。きみぞ」

「やっぱり後片付けは明日でいいかな……」

家事に几帳面なポールも、今夜は手抜きに同意した。ピスタチオの殻を拾うより、優先させたいことはいくらでもある。フィルムより素敵な生身の身体。それが恋人のものならば、優先順位は一番に決まってる。

「先日は失礼したわね。まさかポルノ嫌いとは知らなかつたものだから」

「つこり微笑み、現われるローマン。おれは彼に一言も“ポルノ嫌い”を宣告してはいない。ポールに告げたことがこっちへ流れることは、この付き合いの中ではやむなしということを、おれは何となく理解しはじめている。

「おわびに今日はいいものを持ってきたわよ」と、ピンク色の紙袋を差し出す。

「マーティンズのチョコレート」「

「惜しいけど違うわ。とってもスウィートだけど、食べ物じやないの。デスペラードとトロイとリプリー、どれがいい?」「なんだそれ?」手渡されたチョコレート専門店の紙袋。そこには三本のDVDが入っている。

「映画よ。セクシーな映画。このあいだのは趣味じやないんでしょ

? あなたでも興奮できるようなものをチョイスしてみたのよ

「ありがたいけど、鎧や殺し屋に欲情する趣味はない」

「ロード・オブ・ザ・リング つてのもあるけど」

「ホビットにも同じくだ」

「なあに、せつかく人がいろいろ考えて持つてきただつてのに……そ
ういえばあなたのDVDのコレクションつて、あの英國のくんちく
りんなお笑い番組とかだものね。まさかああいつのに興奮するとか
?」

「誰がだ！ そもそも何で“興奮”とかそういう話になる？ ロー

ド・オブ・ザ・リングも、デスペラードも、それを鑑賞するときは
そういうこといちいち考えないだろ？」

「あたしは考えるわ」

「…………わかった、そうだよな。さみには普通の常識が通用し
ないんだつた。真に受けて議論しようとしたおれが馬鹿だつたよ」
「あら、じゃあ“普通の常識”とやらを、とっくり聞かせてもらお
うじゃないの？ “普通のあなた”は何なら興奮するわけ？」

ローマンの質問はふるついていた。じつにうじとを常に考えて生き
ているわけではないおれにとって、それはすいぶん難問に近い。そ
れからポールも加えて三人で話し合い、“普通のおれ”がようやく
見つけたのは“植物”という単語だった。

「植物？ あなた植物に興奮するつての？」 変態でも見るような顔
をするローマン。彼にそんな目で見られるとは、心外もいいとこだ。
「直接それについてわけじゃない。なんていうか……整のカーブとか、
花弁とか……香り……それってセクシーだなって……うまく説明でき
ないけど」

しどろもどろでローハーカップに話しかけるおれに、ポールが助
け船を出す。

「うん、何かそれってわかる気がする。南国の花なんて色気がある
よね」

「あたしは花よりバンデラスだけど。でもまあ、センスは悪くない

わね。じゃあ、その延長線上で考えてみましょ'うよ

「延長線上？」

「そつ、セクシーだと思える事柄から、さらに範囲を広げていくの。あなたは植物を見て、そこからエロティシズムを感じるのよね？花のどこがセクシーだと？」

「それは……なんか不思議な色してるだら、グラビアショングかつてて。植物は纖細だし、とても神秘的だと思えるよ……」ソフィーの話でいいのか？」

「ええ、続けて」

「茎のカーブは優雅だ。よく見るとウブ毛が生えてたりして」

「それで？ そこからどんな人がイメージできる？」

「美しい女性の脚ライン……」

「なんでそうなるのよッ！」

「しかたないだろ！」

真性ゲイと、ほぼストレートの新米ゲイ。会話が平行線なのは予想の範囲内だ。

「とにかく……おれは他人がセックスしているとこ見ても興奮しない。それを不幸だと思ったことは一度もないよ」

「ポルノじゃなくて、奇麗な映画のベッドシーンとかも駄目なの？」

と、ポール。

「いい映画なら感じられる……けどそれも数分だ。ポルノみたいに気持ち悪いとかは思わないけど、やつぱりああやつて画面に切り取られたものを眺めるってのは奇妙な感じがするよ」

「でもマスターべーションはするでしょ」きらり、ローマンの皿が輝く。「どう？ しないとは言わせないわよ。ポルノが駄目ならどうやってするの？ イマジネーション？」

艶やかな微笑で、詰め寄る美形。セックスの話をしているときの彼は、どうしてこんなに輝きに満ちているのだ（あまり認めたくない上に、ものすごく嫌な感じだが）。

「イメージネーションとかもあるけど……何かな……セクシーな小説

とか……」

「ポルノ小説？」

「ポルノじゃない。普通のでもセクシーな描写はあるだろ。そういうのだったら興奮するかもな」

「んま、聞いた？ ポール、あんたの彼氏は文学青年よ。紙とインクでオナニーができる」

「茶化すな」

ポールは身を乗り出し、「小説ってたとえばどんな？」と、質問する。

「これというのはすぐには思いつかないな。でも好きな作家は何人かいる。カポーティとか……」

「冷血 でマスター・ベーション？」と、冷やかすローマン。

「それは無理だ。いくらなんでも」

「他には？ セクシーな作家って言うと誰？」

「クライヴ・バークーはホラーだけどセクシーだ。それにウォルト・ホイットマン。彼は小説じゃなくて詩だけど。もうずっと昔から大好きだ」

「あらちょっと待つて……あなた、それって……」

「え？」

「みんなゲイよ……」

「なに！？」

“ほんとか？！”という思いを込めてポールを見ると、彼は「そうか……言われてみれば……」と、納得したように頷いてみせた。

ローマンはおれの肩に手を置き、「これでイアン・マッケランの映画のファンで、エルトン・ジョンの曲を聴いてたりしたら完璧ね」と、何らかの太鼓判を押した。

「ジョージ・マイケルのアルバムは？」

「それもありよ」

「なんてこつた……」

「あなた潜在的には完璧にゲイなのね。おそれいっただわ」

最終的な結論 ディーン・ケリー＝潜在的には完璧にゲイ

こうした精神分析つてのは、たいがい口クな結果にならない。ジグムント・フロイトによれば男の八割はマザコンだし、カール・グスタフ・コングでは集合無意識や共時性にまで及んで、問題の答えは宇宙にまで広がつてゆく。さらにローマン・ディスティニーにかかると『すべて男つてのは、かなりの率でゲイの素質があるのよ』つてことになつてしまふのだ。

「まあでも、小説で感じるつてことは“性的視覚不能”つてわけじゃないのよね。さつきも言つたけど、そこからさらに範囲を広げていいくといいわ」

「これ以上何も広げたくないよ。自己認識でショック死しそうだ」「イメージネーションをもつと広くとつていくだけよ。想像を羽ばたかせるとも言つわね……ねえ、あなた小説は好きなのよね？　ちょうどいいわ。知人の出版社でね、“官能小説”の新人賞を募集しているの。ゲイ専門の書籍を扱う会社だから、投稿作品はもちろん“ゲイ文学”よ。セックシーンがノルマに課せられている以外、内容は自由。大賞を獲つた作品は、出版されることが約束されるわ。どう？　自己を掘り下げたり、イメージネーションを広げるにはもつてこいでしょ？　やってみない？」

「小説なんてこれまで書いたことないよ」

「でも文字は書けるでしょ？　出版されたら名前と印税が手に入るわよ」

「ゲイポルノで名を成す？　どうかな、親にバレたら大変なことになる」

「名前なんかペンネームでいいのよ。ぶっちゃけこの新人賞、応募が少ないんですって。そんなどから見本というか、サクラでもつて参加してくれないかつて話なのよね。もちろんサクラであつても賞レースの資格はありよ。大賞は出版契約の他にバハマ旅行もついてるんですねって」

「応募が少ないのなら、バハマ旅行も夢じやないかも」ポールが興

味を示した。

「そうよそうよ。ね、どうせだったらみんなで書いてみましょうよ

「みんなって、おれたちみんな？」

「そう、各自がここで競い合はるの。面白うじやない？」

セツと右手を上げるポール。「いいね。ぼくは乗った

「セツこなくつちや！ ディーン、あんたはどう？」

「オーケー、いいよ」

締め切りは半月後。互いに影響されではよくないという理由から、完成するまでは決して作品を見せ合わないことを誓い合はり、地道に執筆活動は続けられる。

何に対しても努力家のポールは、常にメモ帳を持ち歩くようになり、思いつくことがあれば、たとえ会話の途中であっても、それに書き付けることを忘れない。時折、「もしきみが階段の下にいたとして、上から急に人に呼ばれたら、きみはそれを上る？それとも相手が降りてくるのを待つ？」といった、なにやら謎めいたことを、唐突に訊いてきたりもするようになった。

おれはといえばそこまで熱心ではなく、とりあえず手持ちの小説を片っ端から読み返してみる程度。しかしそれはかえって逆効果だつた。名作の威光にあてられ、自分の書くものがやたらちっぽけなものに見えてくる。スコット・フィッツジエラルドやパトリシア・ハイスマスに張り合えるわけがないとわかつていながらも、創作がもたらす苦悩に、書く前から筆を折りたくなつてくる。

まあいいさ、おれはプロってわけじゃない。ヘタクソで当たり前だし、ただ楽しんで書けばいいだけのこと。それがたとえ「ハーレクイン・ロマンスみたい」って評価であつても、書き上げることに意味があるのであるのだから。

「ハーレクイン・ロマンス？ おれの作品がハーレクイン・ロマンスだつて？」

新人作家予備軍のおれたち。各自出来上がった作品を持って プレ発表会 の名の下にふたたび集結。おれの力作を『ハーレクイン・ロマンス』と評したのはローマンだ。

「ハーレクインなんて読んだことないぞ。それってどうこいつ意味だ？」

「褒め言葉なのか？」

「褒めてもけなしてもいいわ。ただの感想。お気になさらず、」

「どうも引っかかる言い方だな……ポール、きみはどう思う?」

ポールは思案げな表情で原稿を見つめ、「ずいぶんブランド名の羅列が多くない?」と、だけ言って原稿をおれの手に戻した。

「そうか? それって変か? この主人公がリツチだつて表現しようと思つたんだけど」

「もつとわかりやすくシャツの値段をイチから表記するつてのはどうかしら?」手から原稿をひつたくるローマン。ページをめぐり「セックスのシーンはどこよ? 書くつて約束でしょ?」と、眉をひそめる。

「あらだろ。よく読めよ」

「どこ?」

「ここだよ」と、指し示すポール。

ローマンは無言で目を走らせ、しばらくの後「なにこれ。何してるかさつぱりわかんない!」と、顔を上げた。

「“そつと触れた”つてどこに? “共に感じ合つた”つて何を? ポール、あんたこれで興奮する?」

「興奮はともかく、奇麗な文章だよ」

「そらみろ! 芸術の理解できる奴もここにはいる!」おれは同士の肩に腕を回す。

「わたしの好きな芸術は、もつとエキサイティングなものなのよね

……」

「人のをとやかく言つてないで自分のを見せろよ」

「ええ、いいわよ。どうだ?」

差し出された紙の束を、ポールとふたりで覗き込む。1ページ、

2ページ、3ページ……。紙をめくる音だけが室内に響きわたる。その静けさをやぶり、おれは席を立ちかかる。

「しばらくバスルームいるから、終わったら……」

「なによっ！ 最後までちゃんと読みなさいよっ！ 無礼よあんたつ！」

「もう……もう充分……」

「すうじね。本当にポルノ作品だ」感嘆したようなポールの言葉に胸を張るローマン。

「すべてのゲイを奮い立たせる官能小説よ」

「すべてのストレートは萎える……」

「情けないこと。ひょっとくらい興奮する箇所があるのでしきゅう。ここなんてどう？『彼は自身の猛り狂うペニスを、ショートパンツから掘み出した。その熱い肉はボビーのフレッシュな肉壁を割つて入り……』」

「やめろー・やめろー！」

「さすがに顔が赤くなるね」

「この傑作がわからないなんて、あんたたちまだまだね。ポール、あんたのは？」世紀の名作は書けた？」

「うん。きみの後には見せづらいけど……」

「安心しろよ。ローマンの後なら、どんな作品でも一服の清涼剤に同じだ」

ポールの作品は誰よりページ数があった。これを読むのはちよつと面倒なんじやないかとおれは思っていたが、それはまったく杞憂に終わる。最後まで読み終わつたあと、おれとローマンは同時にため息をついた。

「ちょっと……これ素晴らしいじゃない、ねえ？」うつとつづぶやくローマン。

おれは頷き「すうくおもしろい」と、感想を述べる。

「本当？ うれしいな。頑張った甲斐があった」ポールは照れたようすに微笑んだ。

『すゞくおもしろい』っておれの「メント」は、この名作に対しても
まりに短すぎる感想かもしない。これはもつと多くの言葉で賞賛
されるべき読み物だ。そんなの恋人の欲目だらうつて？ だつたら
このローマンを見てみればいい。ファッショングラフ誌しか手に取らな
い男が、まるでセックスの後みたいにぼうつとした顔をしてるんだ。
どう考へてもこれが一等賞。おれたち三人うちのみならず、きっと
その新人賞とやらでも上位まで ひょっとしたらバハマ旅行も
行けるかもしれない。

投稿のためにと原稿はローマンが持ち帰ってしまったが、おれは
ポールに頼んで、もう一度それをアウトプットしてもらつことにし
た。アンダー・ザ・ローズと題されたポールの小説を、ひとり
でゆつくり読み返したかつたからだ。

物語の時代設定は19世紀末。ロンドンに生きる若者の恋愛がス
トーリーのベースになっている。主人公はジャックという青年。そ
の恋人である男性のパーシ。ふたりは互いに引かれ合い愛し合つが、
彼らの住まう時代がその行為を許さない。求め合つゆえの葛藤と苦
しみ。結ばれたかと思えば突き放される不実な愛。孤独に堪えかね
た主人公が、恋人を想つてマスターべーションするくだりは、マイ
ケル・ブレイクのダンス・ウイズ・ウルブズの同場面に相当す
る名シーンだ（そうこれがお約束の“ノルマシーン”）。こんなに
も深く入り込める美しい物語を、おれは今まで見たことがない。主
人公の境遇に思い入れるあまり、恋人同士が引き裂かれた場面では、
あやうく涙が出そうになつたほど。そうまで感情移入させられた作
品が、“佳作どまり”だと知つたとき、おれはローマンに「こいつ
はデキレースなんぢやないのか？」と、賞の不正を疑つてかかつた
ほどだった。

「なんでポールのがグラントプリじゃないんだ？ どう考へてもこれ
が一番の傑作だろ？」

結果発表が載つた雑誌を手に、憤りを訴えると、ローマンはさら
つと「世間はもっとわかりやすいものを好む傾向にあるのよ」と、

言つてのけた。新人賞を獲得したのは ブリジットジョーンズの日記 のゲイ版みたいなやつ。ポールの作品の方がよっぽど高尚で素晴らしいのに。

「きみとおれの作品が落ちたのは納得がいくよ。しかしポールのは

……」

「選考委員だつて馬鹿じゃないわ。あれが面白い作品だつてのは、わかつてはいるのよ。ただ雑誌の傾向とはあまりにも違ひすぎるからつて。それでね、友達の編集者は“これも何とかして公開することにしよう”って言つてくれたの」

「出版を？」

「それは無理なんだけど、ウェブにアップしていいかって話だつたわ。そして出来ればあれの続きを書いて欲しいんですけど。サイトで連載にしたいそうよ」

「サイト……インターネットか」

ポールは黙つておれたちのやりとりを聞いている。

「どうかしら、ポール？ あの作品を公開させてもいい？」

「うん、別にいいよ」 その表情はいつもと同じ。ガツカリした様子でも、嬉しそうというわけでもない。感情の起伏があまり激しい方ではないポール。はしゃいだり落ち込んだりということが多い彼は、ときどき感情が読みにくいことがある。

その晩、ベッドでポールに「嬉しくないのか？」と、聞くと、思つた通り。「別に」というシンプルなコメントが返ってきた。

「そうか、じゃあその逆は？ 賞に漏れて残念？」

「それも別に」

「プロの編集者の目に留まつたんだぜ？ 公式なサイトに掲載される。それなのに少しも嬉しくないって？」

「少しもつてわけじゃないけど……」 ポールは寝返りを打つて、こちらを向いた。「そもそもこれはぼくたち三人のお遊びで始まったことで、賞自体に特別な思い入れはなかつたしね。せいぜい“バハマにタダで行けたらいいな”ってことぐらいで」

「欲がないな」

「欲はあるよ。バハマにタダで行けなくて残念」

「そうじやなくて、『自己顯示欲』の方だ。きみは名声に興味がないんだな？」

「名声だつて？ “ゲイポルノで名を成すのはどうかな” って言つてたくせに」

「この際だ、出発点はどこのだつてこいつだ。きみの作品はずいぶんよ。ホイットマンでさえもおれを泣かせることは叶わなかつたつてのに。本気になつて取り組めばピューリッツァー賞だつて」

「アメリカが舞台の話じゃないから、ピューリッツァー賞の対象にはならないよ」

「ペン／フォーカナー賞つて手もある」

「きみは愛で目がくらんでる」 声を立てて笑うポール。 「でも」と、つぶやき、「きみが続きを読むみたいなんなり……」

「読みたいさ。もちろんだ」

「そう？ ほんとに？ だつたら書いてみよつかな」

「きみの作品を読みたがるのはおれだけじゃない。多くの人が続きを読みにするようになるだろうな。絶対。きっと間違いないよ」

「このおれの予言はみごと当たり。出版社のサイトで公開されたホールの小説は、掲載されてからの一週間で過去二ヶ月のヒット数を軽く超え、ゲイのローマンの功績だ）。サイトに設置された専用の掲示板に寄せられるコメントは「すばらし」「おもしろい」「続きが楽しみ」などの熱いメッセージばかり。『自己顯示欲』のあるおれは「その作家の恋人はおれだぜ！」と、書き込みたい衝動にかられもするが、それはやめておくことにする。作家の私生活は謎に満ちているべきだ。老人と海を書いた男は躁鬱病で自殺したとか、戦争と平和を謳つた非暴力主義者が、妻と不仲の暴君だったとか、そういうことは物語とは何の関係もないこと。この世界には芸術が必要で、なんでも暴いて貶めればいいといつものではない。お

れはポールの恋人で、サイトに寄せられる賞賛をほくそ笑みながら眺めるのみ。いずれピューリツサー賞を獲るその日まで、己の身分は隠すとしよう。

「まだ起きてるのか」

ドアの下から乳白色の灯りが漏れているのを見つけ、作家の部屋を訪ねる。

「明日も早いんだろ?」肩を背後から揉んでそう言つと、ポールはラップトップから目を離し、「もう寝るよ」と、伸びをした。

「でもあとちょっと、キリのいにこりまで書いてからね。週に一度くらいは更新したいし」

「そんなにハイペースでやれって言われてるのか?」

「そういうわけじゃないけど……みんな楽しみにしてるしね。サービス業の性かな。喜ばれるとつい。ねえ、そうだ。先日きみとした議論。あれをネタにしてもいいかな?」

「議論?」

「豆乳の話」

「あれを?」

「そう」

「あれをどうやってストーリーに盛り込むって?」

先日の議論。その高尚なテーマは、ソイビーンミルクはミルクか否か。おれが主張したのは『“ソイビーンミルク”といつ名称は改めるべきだ』という意見。“ミルク”といつ語はメスのほ乳類の身体から出る体液に限られるものであり、植物である大豆はそれに当てはまらず、英語をよく理解していない者には一不必要な混乱を招くためであるというのがその理由。対してポールは『“ミルク”といつのは、牛乳に限らず広く使用されるものであり、さらに別の単語をプラスしてできる複合語である』と唱え、“ソイビーンミルク”、“ローンミルク”などに表されるように、それは“マザーズ

ミルク”のみ限定されるものではないと言い張つた。……とまあ、

“議論”つてのはそんなところ。

「あれが小説のネタになるのか？ 19世紀末の英国で主人公が苦惱する？『ソイビーンミルクはミルクか否か？それが問題だ』」
おれのハムレット口調に、ポールは「そうじやないよ」と、くすぐす笑う。「そうじやなくて会話のユーモアنسとかそういうのを書こうと思つて。どう？ いいかな？」

「ああ、もちろん。何を使つてくれても構わないよ」

深夜までコンピューターの画面を見つめているポール。恋人としてはもちろん心配だが、いちファンとしては「早く続きを！」という気持ちもある。なんたつておれはこの作家の大ファン。イチ早く彼の才能に目をつけた、ファンクラブ会員第一号だ。先日の議論、ソイビーンミルクはミルクか否か。それがどうストーリーに反映するのか？ 創作の裏事情まで知つてしまえば、ますます続きを読みたいになつてくる。

物語の続きを楽しみに待つなんて、子供の頃にコミックの連載にハマつて以来。それが他ならぬポールの作品だなんて、實に驚くべきことだ。ジョン・レノンはヨーロッパの芸術に惚れたが、おれの場合は順序が逆。まずポールに惚れ、その後に彼のアートに惚れた。いくらアーティスティックだとして、おれはヨーロッパには惚れられない。愛としてどつちが純粹かは論議しないおくことにしよう。

我が家の中はラインが一本。それは同居以来、おれとポールで共有しているものだ。ナンバー・ディスプレイがないため、呼び出しが音だけでは、どちらにかかるべき用件かはわからない。今おれが取つたのはポール宛の電話。「ハッロー」と言う挨拶の声はゲイのキャロリン。

「やあ、キャロリン。久しぶりだ。女装パーティ以来か」

「あら、ジャックの方ね。ほんと、お久しぶりだわ。お元気？」

「ジャック？」

このラインはポールとおれ専用。“ジャック”という人間はここにはいない。

「そう、ジャックよ。ジャック。アンダー・ザ・ローズの主人公。わたしも読者なのよ。ねえ、ジャックのモデルはあんたでしょ？」

「アタシすぐにわかつちゃつた」

「おれ？ おれがジャックだつて？」

「あら？ 違うの？」

「ポールはそんなこと一言も言つてないけどな……」

「そうなの？ でも似てるわ」

「ああ、髪の色と目の色は同じだ」

「そんなことじゃなくて、もつと内面的な性格のことよ。てっきりあなたをモデルにしているのかと思つたけど」

主人公の“内面的な性格”。それはどういうものか、ポールの小説を読んでいない読者諸君に説明しよう。

物語の主役であるジャック・トルハースト。髪は黒で、目の色は青灰色。周囲の反応から、彼の容姿がハンサムだといふことはわかるが、どこか近寄り難いタイプの男もある。その恋人であるパーシは同性愛者で、髪はブロンド、目はブルー。ふたりは居酒屋で出会い、愛を深めていくが、良家の出であるジャックは世間体を気するあまり、自分の愛情にオープンになれない。感情に正直な恋人に対し、主人公は己がゲイであることを隠し、否定しようとさえする。そこに軋轢が生じ、物語は面白さを増すのだが……。クールに見えてその実、芯は脆いジャック。誰に似ているかと考えてみれば……確かに。こいつはおれによく似ている。指摘されるまで気がつかなかつたが、言われてみれば本当にそうだ。

そのことが本当かどうか、その夜おれは小説家の元を訪ね、直に確認することにした。言つまでもなく、ファンと作家は同じ家に住んでいる（なんて便利！）。

「まだ続きを？」 そうおれが聞くと、「もう寝るよ」と応えるポー

ル。このやりとり、最近の定番になってきた。

「なあ、聞きたいんだけど、この“ジャック”って男は……」

「うん?」

「こいつはもしかして……おれなのか?」「ポールはちょっとやりにくそうな顔になり、「そつ」と、短く言った。

「そうや。この主人公のイメージはきみなんだ。でも、そういうと思って書いたわけじゃないよ。ただなんとなく、結果的にそういうたつてだけで」

「そうか……」

おれがああまで作品に感激したのは、つまりそういうこと。自分が主人公であれば思い入れもしやすいし、涙をこぼすほどに感情移入もするだろ?」

「もしかして掲示板を見た?」と、ポール。

「掲示板?」

「ここの書き込みを見たのかなって」

ポールが示したサイトの掲示板。そこには『なんでもこれは実話で、作家とその恋人がモデルなのだと』というコメントが、読者によつて書き込みされていた。

「どうしてこんな? おれでさえも知らなかつたつてのこ……。いや、おれはここは見てない。キャロリンに指摘されて気がついたんだ」

「こういうのつて困る? 嫌な感じ? きみにとつて迷惑かな?」眉を下げるポール。その表情から察するに、困っているのは彼の方みたいだ。

「別に嫌じやないよ。言つたら『何を使ってくれても構わない』って

「本当?」

「ああ、むしろ光栄だね。おれはきみの芸術に、ほんのわずか貢献できてる。モテル料は印税の一割で構わないよ」

「印税なんてない。これはただの趣味なんだから」

「今はな。でも将来はわからないだろ? バハマに別荘が買える可能性だつてある」

「作家になんてならないよ」

「コナン・ドイルだつてそう言つたかもだ。『わたしは医者だ。作家になんてならない!』」

「コナン・ドイルにバハマの別荘……ほんと、きみは愛で目がくらんでるよ」嬉しそうに苦笑するポール。下がつた眉はこれで元通り。「ところで続きはどうなつた? もう読んでもいいか?」

「ん、いいよ。あとはスペルをチェックするだけだし」ポールはそう言つて椅子から立ちあがり、場所をおれに譲つてくれる。待ちに待つた物語の続き。誰よりも早く読めるのは作家の恋人の特権だ。物語の中盤、主人公の青年たちが議論を始めるシーン。彼らが論じているのはイングランド国教会のありようと、そのアンチテーゼ。完全な人間とは何かを、イエイツやワイルドの言葉を引用しながら話し合つている。

液晶画面を見ながらおれはつぶやく。

「そうかこれが……」

「うん、そう。わかつた?」

“原始キリスト教”という単語を、“ソイビーンミルク”に置き換えれば、これは確かに先日のおれとポールの会話だ。

「元ネタが『豆乳議論』だなんて、誰も思いもよらないだろうな」

「いろんなところにネタはあるよ」

「でもこれは現実とは違うな? おれたちにはこんな場面なかつた。言い合いの果てに、個人的ななじり合いに発展していくよつなことは」

「そこがフィクションさ。そりやつてドラマ性を盛り上げていかな
くつちや」

「うまいもんだ。もう完璧にプロの作家だな」

「そんなことないよ」

「謙遜するなよ。おれはきみが誇らしい……」座つたまま、彼の腰を引き寄せ、胸の下に顔を埋める。シャツをめぐり上げ、その下にある皮膚にキスを繰り返し、滑らかな身体を優しくまさぐる。

「ディーン……」

「本当の芸術は人を興奮させる」

「うん……それは嬉しいけど……ごめん。ぼくは今日はもう寝たい。本当に疲れてるんだ」

「そりか……」

「ごめん」

「いや、いいよ。うだよな、きみは明日も仕事なんだし」

「ごめんね」

「いいつて。ゆっくりお休み」

「うん、ありがとう」

性欲を持て余しつつ、理解ある恋人はただ去るのみ。これが小説であれば、ドラマ性を盛り上げるべく、恋人たちは炎のようにお互いを求め合うところだろう（ここで“炎のように”って表現をしてしまうあたり、おれには表現センスがないことがよくわかる）。

現実は物語のようにはいかず。宗教論議の末に、個人的ななじり合いに発展することもなく、キスのあとにセックスに発展することもない。後者についてはちょっと残念だが、芸術のためならば、時に忍耐を余儀なくされることもある。アートの使途はただ耐えるのみ。ローマンから借りたDVDでも見て寝るとしよう。鑑賞中、おれが不埒な振る舞いに及ぶことはないことを、念のためここに表明したい。

ポールの職業。それは作家ではなく美容師だ。

おれたちの出会いの場所は居酒屋ではなく、彼が勤める美容室。今となつては恋人となつたヘアデザイナーに、髪をあたつてもらう。場所は自宅のバスルームがもつぱらだが、ときどきはこうやって店

に顔を出すこともある。――には顔見知りも多いし、ゆつたりとした椅子にかけて、雑誌を読むのは嫌いではない。自宅で髪を切つてもらうのも楽で嬉しいが、あまりそれに慣れ過ぎれば、ポールの技術に対する感謝と敬意が薄れてしまうような気もする。彼はプロであり、その仕事はたとえ恋人であっても、金を払う価値のあるものだとおれは思う。それになんといつても仕事中のポールはかっこいい。恋人と生活を共にしていれば、どうしたってお互い生活感というものを見せ合うことになる。寝起きのボサボサ頭や、残業のあと疲労困憊した姿。それらをさらけ出せるのは恋人同士であるからに他ならないが、ある種のマンネリ感を生み出す要因にもなつてしまふだろう。家以外のところにいるポールを見、その姿に改めて惚れ直す。店を訪れるのは、恋人と出会った頃の初心も忘れないためでもあり、休日がバラバラであるおれたちが、少しでも多く時間を一緒に過ごすための苦肉の策もある。一緒に暮らしてゐるのに“少しでも多く”でもないだろうつて？ そう思つんなら、おれがどれだけポールに夢中か、もうちょっと説明するべきなのかもしないな（あ、そこに座つて！ 一、二時間ばかりレクチャーするぜ！）それに今となつてはおれは彼のファンでもあるわけだ。好きな作家に髪を切つてもらえるチャンスがあるというのなら、ファンであれば誰だつてその店に通い詰めるに違ひない。それがハサミを持つステイーブン・キングの店でないかぎり、この企画は大成功だ。

「あの話、最終回は決まつてゐるんですか？」

洗髪を担当してくれるアニーがそう言つたとき、おれは少なからずどきつとし、一瞬言葉を失つてしまつた。情報の伝達は実にスピード。各方面が好きにリンクを貼つていて、どこの誰が讀んでいるか、まったくわからない状態だ。

「ストーリーの続きはおれも知らないんだ。ポールは何も教えてくれないよ。“しゃべると書けなくなるから”つて」

「ああ、やつぱりそうなんですか。わたしたちが聞いてもポールは教えてくれないから。ひょっとしたら“ディーンさんだけは知つてのかなつて……。続き、気になりますね」

「女性が読んでも面白いと思うんだね？ あれはその……ちょっと

“特種なサイト”に連載されてる作品だらう？」

言葉を選ぶおれに、アニーはうなずき「興味深いですね」と言って、くすっと笑う。

「でもそれだけじゃありません。一昨日アシップされた話、ジャックがパーシにしたみたいに、自分勝手に振る舞つてしまふことつて、わたしにも覚えがあるんです。ああいつふうに書かれると“ああ、自分もそういうことがあるな”つて……なんかいろいろなことを考えちゃいますね。あの主人公はディーンさんなんでしょう？」

「イメージとしてはそららしい。おれはあんなに偏屈な性格じやないつて自分では思つてるけどね」

シャンプー台に座つたまま、横たわりもせずにおしゃべりを続けているところに、「アタシも読んでるわよ」と、ダグラスが参入。

「アンダー・ザ・ローズ、もともとああいう小説は大好きなのよ……つて、あら、ゲイ小説つて意味じやないわよ。こいつ見えてもアタシ、文学青年だったから」

自分で言つて自分で訂正するダグラスに、アニーは「文学青年？」と、笑つて語尾を返す。

「そうよ。アタシは純粹な視点から読んでるの。あなたのは“ミーハー視点”。アニーは主人公のファンなのよね？ 本当はディーンに髪を切つてほしくないつて思つてるんだから」

「お客様にそんなこと言つたりしないわ」と、アニー。

「そう？ “ジャックみたいに髪を伸ばしたらいいのに”つて言つてたでしょ。せっかく本人もいることだし提案してみたら？ “お客様、当店では小公子スタイルがおすすめですが？”」

調子良くしゃべるダグラスに、黙るアニー。その頬はビーツみたいに赤くなっている。感情と顔色が一致しているのが彼女の可愛い

ところだ。

ダグラスが去り、「氣を悪くしたらすみません」と、詫びるアニー。「気にしないでください。わたし、ミーハーなんです。ファンなんです。あなたの『照れ隠しに早口で言い、椅子を倒しておれの顔に布をかぶせる。

おれのファン？ そうか、こういう見方もあるんだな？ おれはポールという作家のファンになり、文学青年であるダグラスは“純粋な視点”で、作品のファンになった。しかしみーのようによく、“登場人物を好きになる”という形で、物語に想いを寄せるファンもいるわけだ。人気テレビシリーズの主人公と同じ服を買ったり、ドラマゆかりの場所を旅行したり。そういうファンも確かに存在し、それはアニーが言つよつに『わたし、ミーハーなんです』ってことなんだろう。

アニーとおれは特に親しいわけではない。それが作品を通し、おれのファンになつたと言つ。10も年下の女性からキラキラした目で見られるのはそう悪い気分ではなく、なんだか映画スターになつたみたい……と言いたいところだが、彼女が見ているのは残念ながらおれではない。それは“ジャック・トルハースト”という、ポール創造の人物。ダーティ・ハリー、インディアナ・ジョーンズ、ジームズ・ボンド、R2-D2……。これすべて架空の人物なり（約一名は“人物”じゃないけど）。

アニーはおれ自身のことをほとんど何も知らない。何も知らないのにファンになつていて、むしろそれだからこそ、ファンになることが出来るのだろう。現実のディーンとポールは、小説の中のジャックとパーシとは違う。議論にしたつて豆乳がせいぜい。ストーリーにはセックスについての露骨な描写もあるが、あのすべてがまるつきり事実とは言い難い（もちろん“すべて捏造だ”とも言い難いが）。

アニーに頭を洗つてもらつて、おれの脳裏には小説のエロティックな描写が次から次へと浮かんでは消えていた。そのす

べてをアニーが読んで、しかも“興味深い”と評したことにして、いかの狼狽を覚える。別にあの話は“おれとポールの生活”を描写了ものではない。そうではないが、周囲の皆はあのストーリーをおれたちのこと”として混同しているのも事実。濃い色の布で顔を覆われていてよかつた。感情と顔色が一致しているのはアニーだけじゃない。それは誰かって……おい、言つまでもないだろ？

スタイリングニアにかけ、美容師を待つ。洗髪の後、いつもであればすぐに背後に立つポールだが、今日に限つてなかなか姿を現さない。

鏡に映る自分をナルシスのように凝視していると、ダグラスがそれに気付き、「ポールを待つてるんでしょ」と、鏡越しに声をかけてくる。「お待たせしてごめんなさいね。彼、まだランチから戻つてないの。携帯にかけてみましようか？」

「こ」の時間におれが来店すること、ポールは昨日の時点で知っているんだ。きっとあと数分で戻るんじゃないかな」

「そうね、けつこう前に出たからそろそろだとは思つんだけど……もし急ぐんならあたしがやつてもいいけど？」どうする？

「いや、彼が戻るまで待たせてもうりつよ。こ」に屈座ついて邪魔じゃなければだけど」

「もちろんいいわよ。じゅつくり」

結局、ポールが戻ったのはそれから一時間後のこと。昼の休憩時間をいつもより多くとつてしまつたポール。彼はカフェテラスで居眠りをしていたのだ。

その夜のポールは落ち込んでいた。「こんなことつて初めてだ」と何度も言い、ソファに斜めに座つて、うんざりしたよつたため息をつく。

「そんなに自分を責めるなよ。おれは待ってる間も楽しかったぜ。店にある雑誌を読破したせいでファッショントーシップに詳しくなつたし」言いながらカプチーノを彼に手渡す。

「しつこく愚痴つてごめん」カツップを受け取りながら、詫びるポール。「でもこれがちゃんと予約してくれたお客様だつたらと思つとね。自分の失敗が許せないよ」と、厳しい口調で付け加える。

「そうかな? "ちゃんと予約してくれたお客様"だつたらこんな失敗はしないんじゃないか? たぶんきみはおれだから油断したんだ

「そうかもしだれないので、そうじゃないかもしだれ。とにかくもう一度と、休憩時間に居眠りなんてしないよ」

“しないように気をつける”ではなく、“もう一度としない”と言いつてしまつポール。彼は“失敗する自分”が大嫌い。そのため自分にとても厳しく、その結果、妙に完璧主義になつてしまふらしいがある。今回ポールがした失敗は“居眠り”で、失敗の種類としては些細なものが、『たいしたことないよ』という慰めは、彼にとつて慰めにはならない。この些細なミスが『たいしたこと』に発展する前に、自分を律しようとするのが彼なのだ。

ポールはうーんと伸びをし、マグカツップを持つてソファを立つ。

「どこ行くんだ?」

「え? 自分の部屋だけど?」

「そこで何する?」

「何つて……小説の続きを……」

睡眠不足により毛細血管が浮かび上がつているポールの目。居眠りの原因は彼の完璧主義にある。昼は仕事、夜は作家活動。どちらも完璧に出来ればそれに越したことはないが、身体を壊しては元も子ない。おれはカプチーノを煎れたことを後悔し、「カフェインは終了だ」と、手からマグカツップを取り上げる。

「カモミールティを淹れてやるから、今日はもうお休み

「でも……」

「でもじゃない。明日も仕事なんだろ?」「明日は遅番だよ」

「それでも駄目だ。たまにはたくさん眠らないとな。ローマンがよく言うだろ?『睡眠不足は肌荒れの元よ!』って

「うわっ、すごい似てる」

「似てない。やめてくれ。とにかく……」

「うん、わかった。もう寝るよ」笑い、頷くポール。ローマンの物真似までして、完璧主義者はようやく納得してくれた。

お茶を淹れにキッキンへ向かおうとしたところ、「ね……『ディーン』と、呼び止められる。

「なに?」

「うーんと……」ちょっと小首を傾けるポール。イタズラをしかけようとしている子供のような、何か言いたげな顔でおれを見つめている。

「どうした?」

「ええと……いや、ううと、なんでもない……あのさ、カモミールにハチミツを入れてくれる?」

「ああ、お安い御用」

自室に消えるポール。それはゆっくり眠るために、おれはずいぶん安心する。

湯を沸かし、カモミールのちいさな花をティーポットに入れれる。

小説の中にこういう場面はない。これは“ソイビーンの議論”同じ、ドラマに盛り込むにはあまりにも地味なシーンだ。いくらおれがモデルと言つても、現実なんてこんなもん。身分違いの恋だけの孤独の果て再生する愛 やらのキャッチ・コピーは、おれたちに少しも身近なテーマではない。

リンゴのようなカモミールの香り。金色のハチミツをスプーン一杯、カップに垂らす。恋人の安眠を促す優しいハーブティの出来上がり。これはあまりにも個人的なフレーバーで、たぶんどの恋人同士にもそういうのはあるんだろう。こういうのがおれたちの日常で、

小説のネタには少しもなりそうにない。

定期的にアップされるポールの小説が『一回休み』であつても、サイトは相変わらず活性化している。掲示板ではファン同士の交流も盛んで、ここを出会いの場としてカッブルになる者までいるのだとか、ローマンが教えてくれた。パートナー探しも目的でないおれにとって、このサイトを訪れる目的は、単に『小説の続きを読むため』だけ。続きが掲載されないのであれば、覗きに行くこともない場所だが、「ちょっと大変、あんたサイト見た?」と、言われば、それを見ないわけにはいかなくなつてくる。

「ポール! ちょっと来てくれ!」マッキントッシュに向かい、おれは大声を張り上げる。

「なに、どうしたの?」ポールは血相を変えて、おれの部屋に飛び込んできた。

「見ろよ。例の掲示板」

「これ……一昨年のクリスマスの写真だ」

「誰がこんなことしたんだ? いや、誰でもいい。これは削除できるんだろう?」

「ぼくにはその権限はないんだ。このサイトは出版社が管理しているものだから」

「じゃ、このままか?」

「いや、それはないよ。明日になつたら会社の方に言つて、消してもらひようにするから」

おれたちが見ているのは件の掲示板。そこには『主人公、ジャック・トルハーストのモデルとなつた人物』というコメントと共に、おれの写真が無記名により投稿されていた。おれもポールもマメにサイトをチェックしているわけではなく、ローマンから知らされなければ、おそらくずっと、写真はこのままだったに違いない。投稿時間は今からほんの一時間前 にも関わらず、すでにいろいろ

なレスが付けられていて、それは実にインターNetらしい書き込みに満ちている。

「明日か……明日までこのまま……。いつたい何だつてこんなことに……。くそ、何かコメントを書き込んでやるづか」「やめといたほうがいいよ。場が荒れるだけで何の解決にもならない」

「腹立つな」

「ごめんね」

「きみが謝ることじやない」

「うん、それはそうなんだけど……」

ポールが暗い表情になつた。おれはウインドウを閉じ、努めて明るく「もつと[写りのいい]写真を使ってくれればよかつたのに」と、笑つてみせる。

「いろいろあるだろ、女装したヤツとか」

ポールは笑つてくれない。黙つて画面を見つめている。もし掲載されたのが自分の写真だったとしたら、彼はこんなに厳しい表情でモニターを凝視したりしないはずだ。それがポール。彼つて奴はそういう男。

「あんまり気にするなよ」と、おれは言つ。その言葉には何の効力もない。彼は黙つている。黙つてモニターを見つめ、じつと何かを考えている。それがポール。おれの彼氏はそういう男なんだ。

例えば会社の同僚らと比較して、自分は一年のうちに何度パーティに出ているのかと数えれば、それは彼らが十年 もしくは一生涯かけて出席するパーティの数に相当するんじゃないかと思えるほど、おれは“パーティ”つてものに数多く顔を出している。その理由は簡単。おれの友達たちはパーティ・クレイジー。“誕生パーティ”“結婚パーティ”、果ては“離別のパーティ”まで。何かと理由をつけては集まつて大騒ぎするのが彼らの習性だ。本日の集会の

テーマは キヤロリンのハッピーバースディ（大台突破！）。

1

4丁目の小さなクラブを借り切つて、朝まで踊つて騒ぐのがその習わしなくなっている。“朝まで踊つて騒ぐ”かはともかく、友達同士で集まることはおれも嫌いじゃない。いついかなるときでもパーティは楽しい。たとえパートナーが不在で、ひとりぼっちで出席しようと。会う人ごと、みんなから「ポールは？」と挨拶がわりに訊かれようとも まあ、パーティってのはそんなもんだ。

本日の主役、キヤロリン（女名前だけど性別は男性）は、花に囲まれていた。頭に花。胸元に花。おしりにも薔薇の花を付け、それは本人曰く「今日は花の妖精なの」ってことらしい。

「ポールは？ 一緒にじゃないの？」と、フラワーフェアリー。

「彼は家で小説を書いてるよ。出席できなくて残念だつて、きみに会いたがつてた。これはおれとポールから

プレゼントの入った紙袋を渡すと、彼は飛び跳ねて喜びを表現し、おれの頬に口紅の跡を残した。

「ポールにもあたしからのキスを送つておいて頂戴。ねえ、彼つたらそんなんに忙しいの？」

「昼間は普通に仕事してるからね。書く時間は夜しかないんだ」

「ふうん……でも、あれだけの作品ですもんね。やつぱりまとまった時間は必要だわよね」

その通り。“まとまった時間”が必要すぎて、パーティにも顔を出せず、セックスもご無沙汰なのが今の作家の状態だ。芸術家の恋人であるつてのはときにつらいもの。友達から「今日はポールは？」と訊かれるたび、ひとりきりの寂しさが募つていくような気がする。

「あつら～、“ジャック”じゃない？」

「トルハースト卿にはご機嫌麗しう大慶に存じ上げますわ

カクテル片手に近づいてくるのは、ディヴィッドとモナ。ほろ酔い加減で物語の世界に入り込んでいるようだ。彼らはどちらも男性だが、今日の出で立ちはカクテルドレス。ココア色の肌のモナは白。日に焼けたら赤くなりそうなほど色素の薄いディヴィッドはブルー

のドレス。どちらも自分に似合つ色をよく心得ている。

「ねえ、ティーン、あの話、最後はいつたいどうなるの？」

「まさか“死にオチ”じゃないでしょ？」

「“死にオチ”？」耳慣れない言葉だ。ＬＬ教室で習ひ単語だらりか。

「今の感じだとその可能性もあるかなって。物語はどんどん暗い方向に向かってるでしょ？だから最終回は“ふたりで心中”とかじやないかつて……そのへんはどうなの？」

「どうなのって言われても……続きを読むくてはおれは何も知らないんだ」

「ちょっとも？ なんとなくも聞いてないの？」

「ああ」

「どつちかが死ぬとかの可能性は？」

「わからないよ」

おれがそう言つと、ふたりは落胆したような表情になつた。知つていることがあれば教えてあげたいが、無い袖は振れない。ポールがここに来ていれば、彼らが喜ぶような話ができたかもしれないが。「わたしたち、ストーリーのオチをいろいろ考えてたの」と、モナ。「そうなの。それで“ふたりが死んじゃつたら嫌よね”って、話してたのよ」

なるほど、それが“死にオチ”か。

「もしまだ最終回が決まってないなら、“ふたりを殺さないで”ってポールに言つておいて」

「そうよそうよ。“なんとかハッピーハンド”って。お願ひ

「おれに言われても困るよ」

「あなたに言つてるんじゃないの。ポールにそれをきておいてって話よ」

おれは伝書鳩か。いつのつて苦手だ。まあ、パーティつてのはそんなもんで、それは仕方ない。

「ね、“ジャック”として考えて、これから展開が予測できない

？」きらきらと田を見開くティヴィイチ。おれはそつなく「さあ、どうだか」と答える。

「ねね、あの話、わたしたちも登場できないかしら？ 主人公の友人つて設定で」

「あらう、それはいーわね！ いつでも取材には協力できるわよ」「それは難しいんじゃないかな。きみたちが出来たらコメディになってしまつだろ」

「あらまあ、お言葉ですこと」

「ジャックはそんなこと言わないのよ」

「その呼び名はやめてくれないか。おれはジャックじゃない」

「でもあなたがモデルなんでしょう？」

「それは……そうだけど……」

「あの話つてどこまで実話なの？」

「それ知りたい！ 喧嘩してポールを突き飛ばしたりなんか、あなたまさかしないわよね？」

田をきゅっと細めるティヴィイチ。まるで悪人でも見るような表情。ボーアフレンドを突き飛ばして脳震とうを起こさせ、それを見捨てて外に飛び出したのはおれじゃないってのに。

「前々回の話はどうなの？ 親が連れてきたジャックの婚約者、あのキヤサリンってはキヤリーって人がモデルなんだって聞いたけど？」

「ええ？ ちょっと待てよ、どうしてそんなことまで知つてるんだ？」

「やつぱり！ 実在の人物なのね！」顔を見合させ、手を叩き合つ

モナとティヴィイチ。

確かに、この間のストーリーは、おれのママがキヤリーを連れてきたことがベースになっている。でも何だつて、彼らがそれを知ってるんだ？ 個人情報の漏洩と拡散はネット社会の問題のみならず。おしゃべりなゲイの口には板が立てられない。ことによつたらもつと他の情報も（それがどういったものかはあまり考えたくない）

どこかおれのあずかり知らないところひで公開されたりしているんだろつか。

「ねえ、じゃあやつぱりあなたも自分がゲイだつてことに抵抗あるわけ？ ジャックが思うようなことを考えたりするの？」

「それについてポールはどうなのかしら？ ジャックの恋人はそれで苦しんでるわけだけど……」

なあ、こんな夢つて見たことあるか？ パーティメイクをほどこし、ドレスを身にまとつたふたりの男から、やつてもいない罪について詰め寄られるつて悪夢を。これが夢ならベッドから出ればいいわけで、これが夢じやない場合は……どうすればいい？

「ディーン、ちょっとお話があるんだけど、いいかしら？」

薔薇柄のスーツを着たローマンが手招きをする。ああ、助かつた。地獄で仏だ。彼が仏に見えるんだから、おれの状況はかなり切迫していたらしい。

「あなたひとりなの？ ポールは？」

「みんなそれを言つた。いつそのこと“ポールは自宅”つてカードを首から下げるおこづか……。なあ、きみのスーツ、素敵だな。そういう模様の服、どこで売つてるんだ？」

「みんなそれを訊くわね。“ヴィレッジとチャルシーの境にあるファンシーってお店”つて書いておきましょうか？」

「ファンシーか。覚えておくよ。で？ 話つて？」

「ええ、ポールの小説のことなんだけど……」

「きみまでその話か」

「きみまでつて？……とにかく、例の小説なんだけどね。昨日、友達の編集者と会つたのよ。彼が言つには、アンダー・ザ・ローズこのまま人気が落ちないようだつたら、一冊の本にまとめようかつて……そういう話が社内で出てるんですつて！」

「え…… そうなのか」

「あらやだ。あんまり嬉しそうじやないわね」 ローマンは片方の眉をきゅっと上げた。

「いや……そんなことはなによ。急な話だからや。びっくりして」「そうよねえ。びっくり仰天。すういことだわ。アタシたちの遊びが発端だったのに、まさかこんなことになるなんて……。後日、改めて編集部からポールに連絡があると思つけど……もはアタシ黙つてられなくつて！」

両足を踏みならすローマン。「これは“最上級に嬉しい”という、彼の表現方法なのだろう。おれの両足は地に着きっぱなし。嬉しいわけじやない。ポールが作家としてデビューする。もちろんこれはすぐのことだ。

「本が出るとしたらこいつ頃なんだ？ 近々には出版つてことなかな？」

「近々は無理ね。今の段階ではまだページ数が足りないから、もつと書き足してもらつてからになるはずよ。それに手直しもしてもらうだろうつて」

「そりか……」

「この話、ポールに伝えておいてね。本当はアタシが直に言いたかったけど。今日は会えなくて残念。彼の喜ぶ顔、見たかつたわ」「服の柄と同じ、花が咲いたような笑顔のローマン。彼はポールの成功を喜んでいる。友達なら当然の反応だ。

朝まで騒ぐ決意の友人たちに別れを告げ、大通りに出てタクシーを拾う。パーティの後だというのに、おれの心は晴れやかではない。ローマンの話を聞いてからずっと、頭にあるのはポールのこと。書き足し、手直し。出版に伴う諸々の手続き。出版が決まれば、彼は今以上に忙しくなる。おれはポールの一番のファンだ。これが喜ばしい話だつてことはよくわかっている。わかつてはいるが……。

キャブの運転手がおれを振り向く。「すいません、お客様。道を間違えたみたいで……」これからメーターを止めますから

なんだよ、こんな時に。勘弁してくれ。苦々しくそう思い、いつもならこんな反応はしないのにと思い至る。運転手は丁寧だ。メーターを倒したことも良心的。別に腹を立てるほどのことじやない

い。もしここにポールがいてくれたら、こんな些細なことは気にもならないはず。おれはタクシーにひとりつきり。いつもであれば、「今日は楽しかった」とかなんとか、ポールと後部座席で手をつなぎ合つてゐるはず。友達のパーティにも一緒に行けず、セックスする時間もとれない。それが今のおれとポールで、今後はそれともっと拍車がかかるんだろう。腕時計を見ると、時間は深夜二時に届きそうになつていて。きっとポールはまだ起きている。起きて小説を書いている。日中、居眠りをしてしまうほど、彼は疲れ果てている。今後はそれにもとと拍車がかかるつていうのか？ そんなの絶対にいいことじやない。

結局のところ、いちファンとしてよりも、恋人としての感情の方がまさつてしまつた。いや、これは恋人としても喜びをもつて迎える話なのかもしれない。ローマンからの伝言、おれは笑顔で彼に伝えることが出来るんだろうか……。

ポールの部屋の前に立ち、扉をノック。返事はない。彼はまだ起きている。足下に漏れる灯りでそれがわかる。そつとドアを開く。ポールは椅子に座つている。こちらに背を向け、いつものようにラップトップに向かっている。液晶ディスプレイはスタンバイ。間接照明の薄暗い部屋に、電源ランプの青色LEDが怪しい輝きを見せている。作業に集中しているのではという配慮から、おれの声は小鳥のようにささやかになる。

「ポール……」返事はない。

そつと背後に回り込み、顔を覗く。閉じられた瞼。軽く開かれた脣。デスクランプに照らされ、顔色はブルーがかつていて。それは青白い蛍光灯のせいだろうか？

「寝るならベッドに行かないよ

再度の呼びかけにも応答はない。ふいに不安がわきあがつてくる。

「ポール……おい？」

彼は動かない。睫毛の一本すら、ピクリともしない。なんだこれは？まさかこれがディヴィッドの言つてた“なんとか”つてオチ？小説の中にこういう場面はない。“こんなのはおれたちに少しも身近なテーマではない。おれたちの日常はとても地味で、ドラマチックとはかけ離れているはずだったのに……。ああ、ポール。なんてこつた。おれが女装の妖精たちと遊んでる間にきみは……。

「あれ……ディーン……」床に膝をつくおれを見下ろすポール。

「いつ戻ったの？パー・ティはどうだった？」畠をこすり、背もたれに反つて伸びをする。

そりやそうだ。もちろん彼は眠つてただけ。いつたい何だと思った？

「ああ……パー・ティ、うん。楽しかったよ。デジカメの写真を見るか？」

「うん、見たい。その前にこれをサイトにアップしてから」

「続き、書けたのか」

「ようやくね。これでもう寝不足とはおサラバだ」

「え？ それはもしかして……」

ポールはおれの頬に手を置いた。にっこりと笑い、優しく頬を撫でる。

「最高のラスト。これ以上ない出来映えだつて自分では思つてるよ」

疲れ切つた彼の顔色はブルー。そこに浮かんだ微笑みは、これまで見たことがないくらい、素晴らしい輝きに満ちていた。

サブタイトルに“最終回”と銘打たれた アンダー・ザ・ローズ。作家自らが『最高のラスト』と称したそれは、ストーリーを追つていた者であれば、誰もが驚く展開となつていた。

主人公のジャックとその恋人のパーシ。ふたりが恋人同士だということが世間にばれ、両親らが要請した警察官に追われて逃げるところで、前回の話は終わっていた。ドラマはここからというところ

での最終回。人気の面からも、ストーリー展開の面からも、終了するにはまだ早すぎると誰もが思ったことだろう。読者が驚いたのは、唐突に連載が終わってしまったからではない。むしろ問題なのは、その内容の方だった。

警官に追われるふたりは、逃げる最中、薔薇の生け垣に不思議な“穴”を発見する。いつも会っていた公園で、そんな穴があることを、彼らはこれまで見たこともなかつた。それは不思議な光を發して渦を巻き、およそこの世界では見たこともないような奇妙な状態になつてゐる。追いつめられた彼らは逃げ込む先を失い、その穴に飛び込んだ。それは死をも覺悟した行為であつたが、あにはからんや、素敵な恋人同士は死んだりなぞしなかつた。意識を取り戻したふたりが見たのは公園にあるピーターパンの像。彼らにとつて“新しいモニコメント”であるはずのそれは、この公園にいる者たちにとって、百年も前に建てられたものであり……。

“アンダー・ザ・ローズ(under The Rose=秘密)”という言葉がキーワードになつていて、なかなか凝つた設定ではあるが、これはSF小説ではない。21世紀のロンドンにタイムスリップという展開は、今までの世界觀をまるつきり覆してしまい、安易にハッピーエンドにしたのも流れを無視していると言える。文学作品と思つていたものが、いきなりロバート・ゼメキスばりのエンターテイメントになつてしまつた最終話に、ほとんどの読み手が憤慨したであろうことは、まったく想像に難くないことだ。

こわごわ掲示板を開いてみると、案の定。書き込まれたコメントは読むに耐えないものばかり。「がっかり!」「最悪!」「なんだこりや?!!」熱心さという点においては変わらないが、伝えるメッセージはどれも作者をボロクソにけなしており、好意的な意見もないことはないが、そのほとんどは酷評だ。

ポールはこれを読んだらどうか? そうだとしたら心ない罵詈雑言に傷ついているのでは? 気を回し、“誰がなんと言おうと気にするな”的なことを懸命に言つて聞かせるおれに、ポールは「別に

平氣を」と、肩をすぼめて見せる。

「これがぼくのライフワークつてわけじゃないし。美容師の仕事で何か言われたのなら堪えただろうけどね」

口笛吹かんばかりの涼しい顔。まつたくあつむりしたもんだ。これがポール。おれの彼氏はこういう男。

一方、おれは「ちょっともつたいないな」と、未練たらしい。「あのまま出版の話が進んでいたらどうなったかな？」きみが本気になれば何らかの賞だつて獲れたかもしれないのに」

喉元すぎれば熱さを忘れる。本の出版を憂いていたことなど、追憶の彼方。これがティーン。おれって奴はこういう男。

「そう言つてくれるのは嬉しいけどね。出版の世界はそんなに甘くないんじゃないかな」

「そんなのやつてみなけりやわからないぜ。ピューリッシャー賞……じゃなくて、オチがSFになつたからネビュラ賞とか、そのあたりだ」

「きみは愛で目がくらんでる」と、彼は苦笑した。「とても無理に決まつてる。あの酷評を見ただろ？」

ポールは掲示板を読んでいた。いくらライフワークじゃないと言つても、あれを読んで不愉快にならない作家はいはずだ。

「もう小説はいいよ」と、ポール。「すごく目が疲れるし、内面に入り込んでいくせいで、どんどん気持ちが鬱になつた。ぼくは作家に向いてない。お客さんと直接しゃべつたりとか、そういうのが楽しくて性に合つてるんだ」

それからひとつため息をつき、おれの顔をそつと見つめ「がっかりしたかな？」と訊く。

「がっかり？」

「ぼくの一一番の読者。きみが続きを読むたいつて言つてくれたから、あの話は出来たんだ。他の人のことはどうでも、きみをがっかりさせたんであれば……」

「がっかりなんてしないさ」おれは微笑む。「あのストーリーはき

みが言つた通り。確かに最高のラストだよ。あまりにも展開が急で驚いたけど、よくよく読めば最後までしっかりした話だつてわかる。いずれ読者も理解してくれるわ」

「せつかくぼくのことを持りて思つてくれたのにね」「何言つてんだ。おれは今でもきみを誇りに思つてる。作家としても、美容師としても、なにより恋人としても。きみは誰より最高だ」

「愛で田がくらんでるね？」

「くらむほどに夢中なんだ」彼の両手をとつ、自分の胸に押し当てる。「ああ、ポール、ポール……。作家であろうと美容師であろうとは同じこと。おれたちが薔薇と呼んでいるあの花。それを別の呼び名にしたといひで、その甘い香りに変わりはないのだから……」

ローリオとジヨコヒットからの一節、恋話がかつた台詞を真剣に言うおれに、ポールはくすくすと笑い出す。

「ジャックとパーシは満足してゐるな。平和な時代に來ることができて」

「うん。ほくのキャラクターたちを悲劇的な目に遭わせたくない。そのためにああいうラストにしたんだもの」

「おれたち、旧世紀のカツフルじやなくてよかつたよ。同性愛は有罪……ほんの百年前までそうだったなんて信じられない」

「今はエルトン・ジョンだつて教会で式を挙げる時代だもんね。」

「ああ、それにしてもこの一ヶ月は長かったな。これでまたきみと一緒に過ごせる。夜はパソコンじゃなくて別なことに使うのがいいよ」

「まったくだ。おれだって、ひとりでDVDを見るよりは別なものを見つめていたい」

「ねえ、『ディーン』おれの胸に身を乗り出し、ほとんど小首を傾げるポール。「この話、そもそもの発端は、何をセクシーと感じるかってことだつたんだよ。覚えてる?」

「ああ、そうだった」

「だからさ」

「うん?」

「だから、ね?」

「ああ……」

おれたちはそろつてソファに倒れ込む。あの展開は『想像の通り』
ポルノもイマジネーションも、名作芸術ですら太刀打ちできない
恋人の存在。“何をセクシーと感じるか”って、その答えは言うま
でもないだろう。

身分違いの恋　と　孤独の果て再生する愛　。そんなキャッチ
コピーがなじんでしまう19世紀の恋人たち。同性愛を捌く法のな
い21世紀ロンドンにやつてきた彼らに悲劇は訪れず。きっと彼ら
はソーホーからどこか、パーティ・クレイジーの友人たちと出会い、
シリアルスだつた人生をコメディみたいに変えていくんだろう。

作家はふたりの幸せを願い、そのエンディングをハッピーなもの
と創造した。世界のどこかで幸福にやつているであろうジャックと
パーシ。そのモデルのおれとポールは言うまでもなく幸せで、お互
い愛で目がくらんでるあまり、小説のネタには少しもなりそうもない。

End .

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。
本作品は「Hピソード8：ゲイ入門！」(<http://nco-de-syosetu.com/n6439c/>)」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6302c/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード7：恋愛小説家（Bedtime Story）

2011年8月15日03時25分発行